

感覚処理感受性の程度による自動思考の違いについて

－母親の養育態度の観点から－

24GC006

要旨

本研究では、感覚処理感受性の程度に応じて、ポジティブともネガティブとも判断しがたい曖昧な日常生活場面において、肯定的自動思考の表出傾向が異なるのか検討することを目的とした。このとき、先行研究から、母親の養育態度が自動思考に影響を与えると推測されたことより、本研究においても母親から受けた養育態度との関連をみることにした。調査は、A大学の大学生と大学院生、およびB大学の大学生（ $n=208$ ）を対象に、Google Formsにて高橋（2016）の Highly Sensitive Person Scale 日本版（HSPS-J19）、小川（1991）の Parental Bonding Instrument（PBI）尺度、白石・越川ら（2007）の肯定的自動思考測定尺度（PAL）を用いた Web 調査を実施した。重回帰分析の結果、全体では感覚処理感受性（以下、SPS）が高くかつ養護因子（以下、CA 因子）が高い人は肯定的自動思考の表出傾向が抑制されること、さらに女性においては SPS が高くかつ CA 因子が低い人は肯定的自動思考の表出傾向が促進されることが示された。この結果から、全体について、養護的な関わりが Eysenck によって提唱されている最適レベル（optimal level）を超過した場合、SPS が高い人（HSP）はその特性から「どうせそんなこと思ってないくせに」などと養護的な声掛けや態度に対しても否定的な解釈を行いやすくなり、その結果肯定的自動思考の形成が抑制されたと推測される。また、女性については、CA 因子が低い人の方が母親との過度なコミュニケーションや、何か意見されることが少ないため、CA 因子が高い人よりも否定的な思考に陥る機会が少ないことから、肯定的自動思考が形成されやすくなったと考えられる。以上のことから、SPS が高くかつ CA 因子が高い人に対しては、過度な刺激に配慮しつつコミュニケーションをとることが重要であると考えられる。Aron（2024, p.165）は、SPS が高い人（HSP）は、灰めかしや仕草、目配せ、ニュアンス、声のトーンといった多くの非言語的な要素も含めたうえで相手の言葉を受け取ることから、SPS が高い人（HSP）に気持ちを伝える際は伝える側の言語表現の強度を下げる必要があるとしている。そのため、声掛けする際の非言語的な態度（声のトーン、相手の目を見て話すなど）を意識することで、SPS が高い人（HSP）に対しても養護的に接していることが適切に伝わるといえよう。また、薄ら（2015）の先行研究より、SPS は対人ストレスに対するコーピングでは情動焦点型行動的対処を促進することが示されていることから、認知再構成法などの情動焦点型コーピングも有効であると考えられる。